GR
白雲郷

とりみ

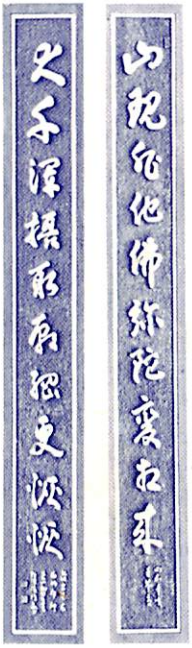
三観音仰拝

51

埼玉　名栗

昭和56年11月17日　宗教法人 白雲山 鳥居観音

山頂の三観音



表紙の解説

山頂に仰ぐ白亜の尊像。

鳥居観音開創者、平沼弥太郎氏悲願の建立で、この発願に寄せられた江湖篤信の浄心を併せ、昭和四十六年落慶した。

開眼は曹洞宗管長、大本山総持寺貫首、岩本勝俊猊下のご親修で、捧げられた法話が、現在堂内正面に両聯として掲げられている。（右掲写真）

山は現ず他仏に非らず
弥陀、相を変じて来るなり
大千、渾しく摂取したもう
願くは網、更に恢々ならんことを

《大意》 山の姿、森羅万象、凡て天の摂理であって、仏さまの身姿変えてのお出ましに他ならないどうぞや、み仏さま、高大無辺の妙智力によって世の大衆を救い導かれんことを。

梵　天　　聖観世音菩薩　　帝釈天

切り取ってご覧ください。

写真解説

写真の仏さまは、鳥居観音のご本尊「聖観世音菩薩」さまです。

西方極楽の阿弥陀国にあって、慈悲の象徴となり、民衆を救うため人間世界に現われるとき、三十三に身姿を変えられたと申しますが、聖観世音菩薩さまは、そのご本身（原身）であられます。

「若し諸の苦悩を受けんに、一心に観音のみ名を称えれば、即時にその声を観じて、解脱することを得しむ」と観音経にとかれています。人間の凡ゆる不幸、苦しみ、悩みから守り救い、幸福を授けて下さる、ありがたい菩薩さまです。

印度、中国をはじめ、わが国でも一番多く信仰されてまいりました。

脇侍の梵天、帝釈天は共に仏法の守護神として観音さまの能化をおたすけいたします。

この三像は、鳥居観音の開創者平沼弥太郎氏が、母の遺言を履行するため自から刻まれたもので、昭和十五年霊場創設の時、お祀りされました。

鳥居観音の裏山に、平沼家の先祖が遺された大桧での一本彫りですが、その佛像のご貌の尊とさは、そのまま観音さまの、み心と拝され、亡き母を念ずる作者の一途の心情と、何百年もの先祖の信心の結願が、ここに化身されたと思えてなりません。

とりゐ　目　次　第51号

表紙①　山頂の三観音仰拝
表紙②　表紙解説
口絵①　鳥居観音のご本尊と脇侍
②　解説

鳥居観音灯篭ながし……鳥居観音　尾尻天外……二
道光禅師ご法話（其三十三）……五
禅のはなし（其一）……大本山総持寺　前副監院　佐藤俊明……八
西遊記（其四十四）……一三
一万体観音満願へのお願い……一七
写経奉納者報告……二〇
故岡部千三先生を弔う……二一
鳥居観音だより……二二

表紙③　寺域案内図
表紙④　これからの行事

鳥居観音灯篭ながし

鳥居観音
尾　尻　天　外

毎年、月おくれの八月十六日、鳥居観音では灯篭流しの施餓鬼法要が行われます。

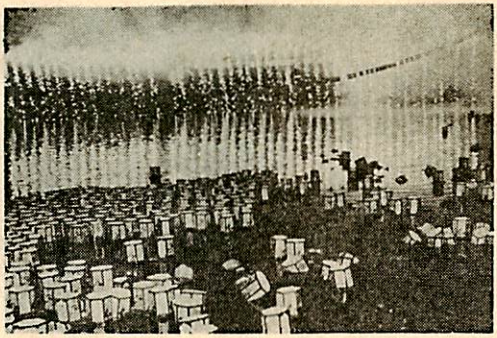
夏休みの時期でもあり、今年は日曜日も重なって、飯能からの名栗川沿は、川遊びの家族連れで混雑し、参拝される方々のバスは、倍も時間がかかったということでした。

法　要　定刻午後四時半もだいぶ遅れて、本堂での法要が始まりました。

仏前に供えられた、色とりどりの灯篭は千数百、天井四面に吊りおろされた五色の施餓鬼幡、須弥壇のみ灯しの奥に、おごそかにまします極彩色の七観音、香煙のあがる中に、村内寺院の随喜をいただいて厳そかに行われました。

施餓鬼の法要は、遠く二千五百年前、お釈迦さまが、方便を廻らされて、大勢の僧侶の威神力をもって、目蓮尊者の慈母の飢餓の苦を救われたことに始まりましたが、人心和合の功徳力が、三世諸仏の大智力にも叶うことを証されたことでした。

中国を経て日本に伝わって以来、お盆の時季にこの法要



極楽の幔幕の中に静かに帰られる灯篭船

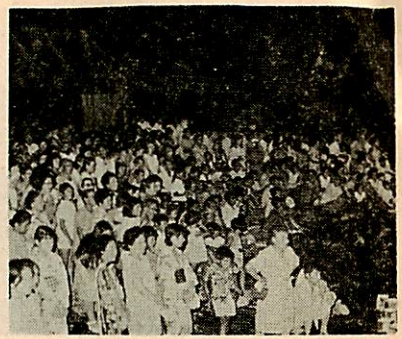
が続けられていますが、高度に成長した文明の中で、兎角個々のエゴが災いして、社会も国家も対立抗争におちてゆく今日——優しい言葉一つさえ持ち続けることの六ヶ敷しい現実のなかで、眼に見えないご先祖さまに、心ろからの報恩行事を行なうという日本の風習(ナラワシ)は、何んという、うるわしいことでございましょう。

灯篭ながし　夕闇が川辺によせてきた頃、打ちあげ花火と共に、灯篭船に灯りがはいります。お坊さんのお経の唱えられる中を、次ぎ次ぎに川岸を離れ、みるまに灯りの帯となって流れます。

先を急がれる仏（灯篭船）さまのおいでの中で、お隣りと肩を寄せ合って、名残りを惜しまれる仏さまもおられます。

チラチラとゆらぐ川面の灯篭、空に広がる花火の彩り、赤、青、黄色、流れる光芒、まこと夢幻の一つ時です。

何十万とも数知れないご先祖さまが、だんだん遠くへ行かれたと思える川下に、花火の「ナイヤガラの滝」がおろされました。さながら極楽の幔幕(マンマク)かと思われるその中に、静かに静かにお帰りになりました。



盆　踊　流灯を終えた参拝者は、盆踊りの広場に移ります。

真ん中の櫓太鼓、流れる音頭に、踊りの輪が二重三重、揃いの「ゆかた」に幼な娘の花模様、足をあげ、手を振る盆踊りは、地獄から救われて、極楽（ゴクラク）に向う喜びいさんだ姿を現したものといわれます。

露店も多くさんならびました。綿菓子、焼いか、天狗の面、お店の軒先の電灯も、昔しはガス灯だったと懐かしんだことでした。

公害などを理由に、次第に薄れてゆくこのような流灯がここ名栗では、年とともに賑わうことでございます。

近隣お誘い合せ、ご供養にご参加いただけますよう、お待ち申し上げております。

合　掌

道光禅師ご法話（故高階瓏仙貌下）

世　間　（其の三三）

今日は自分から売る時代で、たとえば美術家の絵など、自分から、五百円の、千円のと値をつけて発表します。むかしはそうではなく、世間がつけてくれたものであります。それが真個の価値であります。私の友だちに、むやみと力むことの好きな者がありますが、人がきて敬意を表すると、ふんと鼻で答えて、力味かえってうしろにそるから、かげでは天神さまの刀と悪口をいわれています。

「みのるほど　頭をさげる　稲ほかな」

でありまして、けんそんの態度は真に奥ゆかしいものであります。

「さがるほど　人の見上ぐる　藤の花」

そこに、けんそんの徳があるのであります。

どうもとかくに、力味たがるのが人間であります。そんな人間にかぎって、出世している者は少なく、役所などにいきますと、受付方面にいる者にかぎって、恐しく力んでいるもので、奥に通ってみると、上役ほどおだやかな人格を感ずることがあります。ゆえに、

「己の能にほこり、自ら高うして不遜なるときは、人の嫌忌を招くべし」

とあるのです。全くけんそんの徳ということは、たいせつなものであります。つぎは、

第八に親切。これも説明するまでもない、たいせつなことであります。文に、

「本来空なるが故に、人に対して親切なるべし。

親切なれば能く人を感ぜしむ」

とあります。つぎに、

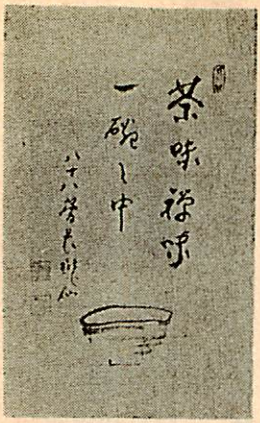
第九は忍耐。

「本来空なるが故に忍耐なるべし。忍耐なればならざることなし。故に忍耐なれば能く人を感動せしむ」

つぎに、

第十好悪。

「己れの好（すき）悪（きらい）と人の好悪と異なるところあるも、事に害なき限りは之を争うべからず。是れ亦感情の関係大なるものなり。故に之を以て人を度するは一方便なり。



以上感情に関する類例の外、苟も之に関係あるものは、敢えて之を用うべし」

といっています。これで感情と交易の二つの方面の類例はおわっておりますが、この三毒、五欲で支配されている世のなかを、わたっていくにはなかなかむつかしい。それでこの仏教世間篇は、本来空の根本まで自己を修養して、それから世間をふりかえりますと、そこで世間に処して、自由の働きができるということを教えたものであります。それから結論に入って、

「上来論ずる如くなるを以て世間即ち空なり、空即ち世間なり、故に空とは断空無にあらずして時々刻々に活動し、事物現われるものなり。然るを或は世間を以って厭うべきものとし山間に蟄居して世塵を避くるが如きものあるは愚痴の至りにして、生きては世間に嫌忌せられ、死しては地獄に堕すべし。

道を講じ理を悟るも、世間に処して無礙自在を得、而して後、衆生を済度せんとするに外なら

ず、豈他あらんや。水清くして地に徹し、魚行いて魚に似たり。空闊うして天に透る、鳥飛んで鳥の如し」

とあります。したがって、仏教はただちに厭世主義のようにいいますが、修養の道程として、いったん世間をはなれ、山にはいって修養する方面を見るからです。ですからそれは仏教主義の半面で、真個の仏教のおちつくところは、そこからこの複雑な世間に再来して、この世間のなかに無礙自在を得ることにあります。だから支那（中国）でも小隠は山に隠れるといってあります。世のなかをうしろに山に引っこんで、そば粉でも食って生活しているところを、世間から見れば美しい生活をしているようにみえますが、それはまだ小隠（隠れかたが小さい）。大隠は市に隠れるといいます。これは大隠的人物は、この複雑な世の塵中にあって、塵に染まらないような達人を申したものであります。それが大乗仏教のいきかたであります。極楽いきもそうです。極楽にいって蓮の台に昼寝していて、気楽に甘んずることではありません。そこまでいったら釈迦牟尼仏のように、この世に帰って世の中の救済に働くのが、成仏の目的であります。

「坐禅せば四条五条の橋の上、往き来の人を深山に見て」

といいます。これは橋の上に坐禅をしていて、往来の人に頓着せず、杉の木でもみるようにまでなることであって、できた坐禅の生活ではありますが、これではまだまだ半途であります。真の禅機（禅のはたらき）は世間をはなれて、しかもはなれず、世間に順応していくところに妙所を得ます。それで、

「坐禅せば四条五条の橋の上　往き来の人をそのままに見て」

と教えてあります。すなわち社会にあって社会におぼれぬ、そこに自由な活動を得ることであります。そこまで本来空の真理を基調として、徹底するところ、それが金剛経の無我相を標準とする信仰の精神で、同時に禅から進む仏教であります。

禅のはなし

大本山総持寺
前副監院 佐藤俊明

黒白二鼠

大本山総持寺前副監院佐藤俊明老師のやさしく説かれる禅のお話しで、道元禅師、白隠、一休さんの逸話など―、日常雑事に疲れた心に新らしい目覚めと栄養を与えて下さいます。連続載せていただける、ご老師に、深く感謝申し上げます。

午前三時、振鈴（しんれい）（起床の合図）が鳴って、止静（しじょう）（坐禅開始の合図）が入るまでの間、木版が五分おきに計三打される。これを洗面版という。

生死事大
無常迅速
各宜醒覚（各々宜しく醒覚すべし）
慎勿放逸（慎んで放逸なるなかれ）

と書かれた板面を打つ暁闇を裂く音は、「眠りから覚めよ」「迷いから覚めよ」「悟りの道に目覚めよ」と警告しているかのようである。私は、洗面版を聞くと、仏説譬喩経の次の話をよく思い出す。

一人の旅人が山道を歩いていた。ふと、うしろに異様な物音が

するのでふりかえってみると、獰猛な大虎が追っかけてくる。
「こりぁ、たいへん」
と走り出した旅人は「あッ」と息を呑んだ。前は絶壁である。
「もはやこれまで?!」と、あきらめかけたら、崖っぷちにある大樹に巻きついた藤蔓が絶壁の下にのびているのが眼に入った。
「これは天のめぐみ、ありがたい」と、その藤蔓を伝って崖の中腹に降り、ホンの一瞬の差で猛虎の餌食にならなくてすんだ。
「ああ、助かった」

と思った途端、藤蔓をにぎりしめてる手が、間もなく体の重みを支え切れなくなっていることに気付いた。

「下に降りよう」

そう思って下をうかがうと、こはいかに、とぐろを巻いた大蛇が口をあけて旅人の落ちて来るのを待っている。

「こりぁ、いかん」と、近くに足場を捜すと、四匹の毒蛇が、近寄らば嚙みつくゾ、といわんばかりに赤い

舌をペロペロ出している。ゾッとして上を見ると、命の綱と頼む藤蔓を、樹の根もとで白と黒のねずみがガリガリかじっている。まさに絶体絶命、旅人はブルブルッと身ぶるいした。

そのとき、旅人の頭上二メートルほどのところにぶらさがっていた蜂の巣から、蜂蜜がポトリと落ちて来て、偶然にも旅人の口に入った。

「ああ、うまい！」

旅人は陶然として酔ったように、絶望の現実を忘れてしまう。

これは何を意味するのか。山道を歩く旅人とは、起伏重畳の人生を歩む私ども人間の姿である。

いままではボンヤリしていたが、ふと気がつくと、うしろから大きな虎が追ってくる。虎とは、各人が背負った業（ごう）のことである。無限の過去からの宿業である。人間は、過去の悪業から遁れようと努力する。そして一時はうまく遁れ得たかに思う。それが、藤蔓にしがみついてホッとする旅人の姿である。ところが、崖の下には大蛇が、棺桶が蓋を開けてるかのように待っている。死ぬのは嫌だ。近くに生きる場はないか、とみれば、四匹の毒蛇。これは地・水・火・風の四大。つまり、一切の物体を構成する四元素のこと。四大不調などというように、この四大元素の不調によって病苦があらわれるとするが、それだけではなく、時に地震・洪水・火事・暴風となり、たえず人間の生命をおびやかす。藤蔓は命の綱、人

間の寿命である。その寿命を、黒白の二鼠、つまり夜と昼が、不断に命の綱をかじっている。こういった上下四囲、窮地の真只中におりながら、人間は不思議にも暗い顔をしていない。それは、落ちてくる蜂蜜のしたたりが口にはいるからである。蜂蜜とは、財欲・色欲・飲食欲・名誉欲・睡眠欲の五欲のことである。バクバクもうけて財欲をみたし、食い気と色気を存分にたのしみ、果報は寝て待て式に苦労しないで有名になりたい。こうした欲があるから生きているのも人間だが、欲のために道を踏みはずし、さらに悪業を重ねるのも人間である。

忘れてはいるが、誰しもが直面するこの絶望の現実にどう対処するか。

諸仏一大事因縁のために世に出現す。直に衆生をして仏の知見に開示悟入せしめんとなり、而して寂静無漏の妙術あり、是を坐禅という……（瑩山禅師『坐禅用心記』）

仏がこの世に出現された究極の目的は、生きとし生けるものに仏と同じ知見を開かせ悟らせるためであり、それにいたる最良の道は坐禅である。その坐禅、いますでに止静が入り、禅堂は深い、そしてひきしまった静寂に包まれている。

西遊記（其の四四）

この物語りに出てくる主な人々

「西遊記」は昔し玄奘三蔵という偉い坊さんが、中国から天竺に、お経文をとりに行く長い長い旅の物語です。道もない嶮しい旅路で、さまざまの魔ものや、妖怪と戦いますが、悟空、八戒、沙悟浄という智恵者や変身術をもった三人のお供の大活躍で、旅が続けられます。

玄奘三蔵法師

中国の偉いお坊さんで玄奘三蔵法師という。天竺にお経をとりに行く長い旅に、悟空、八戒、沙悟浄の三人の供を連れ、魔ものや、妖怪と戦かいます。

悟　空

高い山の上にある大きな石から生れたという猿で、玄奘法師のお供をして、災難に遭う度に、一飛び十万八千里の術や、七十二の変化術を使って大活躍する。

八　戒

形は人間で、顔は猪の妖魔天上界から下界に落とされて、こんな姿になったという。玄奘法師から八戒の名をもらい、悟空達と一緒に活躍します。

沙悟浄

流沙川に住んで、人を喰っていた妖怪で、八戒と戦ったこともあるが、後で玄奘法師の弟子となり、悟空や八戒などと一緒に師匠さんを助けます。

悟空はおどりあがって、如意棒をのばし、道士にうちかかりました。道士は、よこにとんで剣をぬき、如意棒をがっちりうけとめたうでまえは、どうしてどうして、なかなかばかになりません。

鉄棒と剣のうちあう、はげしい音をきいて、七人の女のばけものが、おくから、ばらばらかけだしてきました。

「あのときのさるですね。加勢しますよ。」

女たちは、ふところから糸をくりだし、悟空になげつけました。悟空のうでに糸がからんで、如意棒も思うようにはふりまわせません。手も足もしめつけられて、しびれるばかりです。

「これはいけない。とりこになったらたいへんだ。いのちがないぞ。」

悟空は、口にじゅもんをとなえながら、もんどりうって空へまいあがりました。ところが、女たちのくりだす糸は、空までのびるばかりか、こんどは、やしきを、ぐるぐるまきにしてしまいました。

「うーむ。女と思って、ばかにはできない。すごいものだ。八戒がやられたのもむりはない。だが、ふしぎなはたらきをする糸だ。この女たち、いったいなにものだろう。」

いくらかんがえてもわかりません。そこで、いつものように土地の神をよびだしてきました。

「あの女たちは、くもの精のまものでございます。」と、土地の神がこたえました。

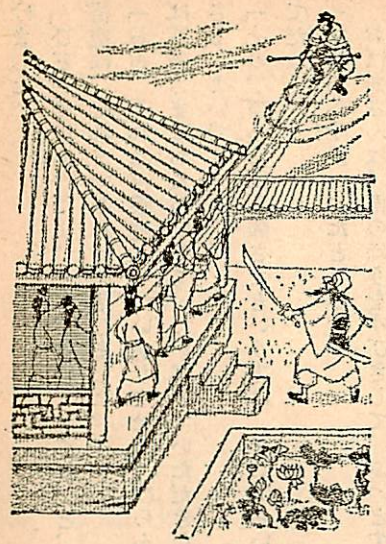
「くも……。あの六本足のくもだな。」

「はい。あのくもたちは、十年ほどまえにこのあたりへきましたが、それからというもの、つよいのをいいことにして、わがままかってのしほうだいです。わたしどもも、まことにこまっているようなしだいです。」

「そうか。くもだったのか。それなら、こっちにもやりかたがある。ばけものども、おどろくな。」

ばけるのは、悟空のおとくいです。くもなどにまけてはいません。からだから七十本の毛をぬいて、にせものの悟空を七十人つくりました。如意棒も七十本にして、ひとりに一本ずつ持たせました。

「それっ。くもの糸を切れ。」
ほんものの悟空のめいれいです。七十人のにせ悟空は、どっとあばれこみ、あちらこちらの糸をかき切り、女どもをおいつめて、とうとう、とりこにしてしまいました。
女のまものどもは、七ひきのくもになって、
「おたすけください。いのちばかりは、どうぞ。」
と、あわれな声であやまりました。
悟空は、さきほどの道士にむかっていいました。



「くもどもは、こうさんしたが、おまえはどうだ。わるかったとあやまれば、ゆるしてやってもいいのだが、まだ手むかいをする気かな。」
「おお、手むかいするとも。こんどはこれだ。」
道士は悟空のすきをみて、やっとふみこんできました。両手をあげたのを見ると、わきの下に、きらきら光るものがあります。
「おや、あれはなんだ。」
よく見ると、目です。小さな目が、りょうがわに千もあったのです。
千の目から、ぎらぎらとつよい光がさして、悟空は、思うようにうごけなくなってしまいました。
「これはいけない。こちらの目がくらんでは、いくさにかてない。えいっ。」
悟空は、もぐらになって、土の中へもぐってしまいました。そして、土の底を二十里もぐってから、地上へあらわれ、ほっといきをつきました。
「どうなさいました。」
どこからきたのか、ひとりのおばあさんが声をか

けました。
「ひどいめにあったよ。まあ、きいておくれ。」と、悟空は、それまでのわけを話しました。
「おお、それは百眼魔にちがいありません。びらんば菩薩さまにおねがいして、たいじしていただきなさるがよいでしょう。」
「その、びらんば菩薩さまという方は、どこにおいでだね。」
「あちらへ千里いったところです。」
おばあさんは、南のほうをゆびさして、ふっとすがたをけしました。これは、観音さまにいいつかってきた、女の仙人だったので、空へのぼっていったのです。
悟空は、さっそくきんと雲にとびのって、びらんば菩薩のところへいそぎました。
「わたしは、そういうあらそいはきらいだが、経文をとりにいく法師を、このままにもできまい。よろしい。いってあげよう。」
菩薩は、ぬい針を一本もって、悟空といっしょに、道士のところへいきました。
「やっ。」と、針を空中へなげると、どこかで、どどどど、と大きな音がして、あとは、しんとしずかになりました。
地上では、道士が目をとじて立ったきり、悟空がそばへちかづいても、見えないようすです。
悟空は、おくへかけこんで、法師と八戒と悟浄をたすけることができました。
「ありがとうございました。ところで菩薩さま、あの道士はなにものですか。」
すると、びらんば菩薩は、だまって立っている道士を、指でおしました。道士はころりところがりました。たちまち七尺ほどの大むかでになりました。
「天竺は、まだ遠い。いそいでいくがよい。」といって、菩薩は大むかでをゆびでつまむと、すうっと、空へのぼっていきました。

奉安された一万体観音の一部

一万体観音奉安満願へのお願い

山頂の三観音の堂内に、合祀されている一万体観音。

その一体一体が、一人一人の施主によって、先祖供養のためお祀りされたものでございます。

白無垢の清楚なお姿は、そのまま子孫の敬虔な祈りを、表象するかのように尊く美しい。

累代にのぼる数知れないみ霊が、観音さまのみ法に抱だかれて、安らいでいらっしゃいます。

このような、皆さまのうるわしいご信心の輪が広がって、現在九千七百体を超え、今一息で満願が頂戴できます。

満願には報恩大法要が、予定されておりますが、この上共博くご縁結びがいただけますよう、お願い申し上げます。

又ご関係の向きなど、お勧進願えれば、まことにありがたいことでございます。

合　掌

奉祀料（永代供養料）

一体　二〇、〇〇〇円也

寺務局にお申越し下さいませ

※奉祀の方には、仏壇用の観音像をお差し上げいたします。

一万体観音 奉安者芳名

昭五六・九末現在
敬称略

型数	住所	芳名
A一	東京北区	溝口 俊江
A一	練馬区	吉次ツル子
A一	調布市	小牧 鈴義
A一	飯能市	真野 清芳
A一	練馬区	佐野 春雄
B一	〃	武関 英夫
B一	小平市	乙川 順二
B一	江戸川区	田村美恵子
B一	練馬区	森 良
B一	岐阜県	森 朝子
B一	日高町	安永 隆満
B一	狭山市	池谷 元行
B一	世田谷区	山本 光子
A一	江東区	栗原浅次郎
B一	小平市	加藤 ヨネ
B一	豊島区	田村 任子
B二	〃	吉松八重樹
B一	〃	石塚亜緒比
B一	青梅市	山崎 克巳
B一	〃	山崎 瑞枝
B一	小鹿野町	増田 守男
B一	名栗村	浅見 イン
A一	羽村町	浅見 宗治
B一	入間市	宮鍋 俊也
B一	岡山市	大磯 桂子
A一	川越市	久木野兼徳
B一	新座市	竹村 公秀
B一	板橋区	浜名 節子
A一	横浜市	中山 智裕
A一	杉並区	高見 啓夫
B一	練馬区	小林 茂二
B一	杉並区	笹川 益代
B一	〃	阿部 末野
B一	〃	田中田一郎
B一	練馬区	桶谷 恒夫
A一	福生市	大満 秋義
B一	茂原市	河野鉄治郎
B一	〃	河野ふみ子
A一	東松山市	尾関 一男
A一	入間市	杉田 秀雄
A一	本庄市	小暮 正之
B一	秋川市	太田 昇
A一	練馬区	福井喜一郎
B二	青梅市	浜野 誠一
B一	入間市	近藤 ハツ
A一	東大和市	峰岸 市郎
A一	福生市	中井 絹枝
B一	東大和市	杉山 喜一
B一	世田谷区	荻野 幸三
A一	熊谷市	高田 忠
A一	狭山市	小島 さわ
A一	青梅市	石川 利夫
B一	川越市	畔川 和子
B一	行田市	須郷 政夫
B一	東村山市	比留間良三
A一	日野市	秋山福之助
A一	茅ヶ崎市	内山 巌
A一	千代田区	荻原 捨三
A一	坂戸市	弓削多正雄
B一	狭山市	鈴木 昭三

型数	住所	芳名
A一	入間市	佐渡　幸枝
B一	〃	黒米トシ子
A二	青梅市	小沢　常男
A一	〃	小沢かず子
B一	所沢市	近藤　節雄
A一	甲府市	平沢　邦時
A一	春日部市	小林紀九男
A一	大宮市	福田　進
A一	武蔵野市	上田　良夫
A一	〃	安藤　房枝
A一	〃	木村四郎雄
A一	〃	基子
A一	〃	木村　勇次
A一	〃	小島　ツヤ
B一	〃	手塚　シゲ
B一	〃	上田　頼重
A一	〃	道子
A一	小美濃登久栄	
A一	三鷹市	上田　正夫
B一	府中市	田中　きみ
B一	横浜市	菊地英四郎

型数	住所	芳名
A一	新宿区	松沢　孝一
B一	八王子市	和智　実
B一	田無市	根立　英二
A一	文京区	浪越徳治郎
A一	新宿区	鈴木　一江
B一	入間市	桜井　為一
A一	山形県	岡田　仁
B一	富山県	井上　正雄
A一	八王子市	小俣喜久治
B一	入間市	中村　敏三
B一	熊谷市	関根　和夫
A一	千代田区	菅谷　義夫
A一	国分寺市	佐藤　良
B一	八王子市	有野　欣也
B一	青森県	鎌田　広志
A一	名栗村	勝又　則夫
B一	新宿区	広瀬　則明
A一	葛飾区	渡辺　登夫
B一	相模原市	品川真理子

型数	住所	芳名
A一	越生町	藤島　弘士
B一	八王子市	大塚　雅子
B一	〃	小池　欣一
A一	飯能市	伊藤　善治
A一	〃	伊藤　道子
A一	新宿区	小田　隆一
A一	〃	青木　国江
A一	荒川区	美濃部美津子
A一	新宿区	大金　俊夫
B四	目黒区	高塚　照子
		伸江

右表計

A型	五三体
B型	六二体
合計	一一五体

奉安総数（五六・九末現在）

A型	二、一五八体
B型	七、五七四体
総計	九、七三二体

地域別奉安者の状況　五六・九末現在

地域別	奉安数（体）	施主数（人）
名栗村	三八〇	一七二
県内	二、七五一	一、九一三
東京	四、七九三	一、三六四
関東	四五九	二四四
関西	一、三〇三	一三四
東北	四六	四〇
合計	九、七三二体	三、八六七人

写経奉納者芳名

昭五六・九末現在　敬称略

数	住所	芳名
三	世田谷区	山崎　果汀
一一八	練馬区	平沼　とみ
二	練馬区	吉次ツル子
二	江東区	清田　春蔵
二	文京区	嘉津三舟心
一五	世田谷区	田中　実
一九	入間市	西沢　仁子
二	入間市	宮岡　要次
二	入間市	宮岡　稲子
二	入間市	宮岡　明弘
一一三	入間市	豊泉　伝吉
一〇	福岡県	武田　房枝
九	杉並区	野崎　直澄
一〇	目黒区	若林　とく

数	住所	芳名
二	江戸川区	鳥居富美子
三	小金井市	関口　京子
四	小金井市	佐々木シゲ
二	小金井市	若林つや子
二	小金井市	若林　敏英
二	小金井市	関口　宏
二	小金井市	石井　ハル
四	小金井市	関口　衣恵
九	小金井市	間野　イチ
二	小金井市	間野　和子
三	小金井市	吉田　ハル
二	小金井市	吉田　玲子
一〇	大田区	国府方金佳
二	所沢市	幸田　吉彦

数	住所	芳名
二九〇	川島町	関　八朗
二二	福岡県	武田　哲矣
三	練馬区	平沼弥太郎
二	世田谷区	山崎久美子
六	船橋市	松本須美子
二	川越市	細田　初雄
二	清瀬市	山本富美子
五	青梅市	滝口常右ェ門
一〇	練馬区	岡部　錦子
七	武蔵野市	内田さつき
四	横浜市	小幡美代子
五	杉並区	石田　宗国
五二		他　五二名

法華経巻物（表装）
三巻、神奈川県　柏木　亘

右表計　七七一巻　施主九三名

納経総数
巻数　九、五六一巻
施主　三、〇五三名

地域別納経者の状況

（五六・九末現在）

地域別	納経数 巻	施主数 人
名栗村	一二三	七八
県内	三、三九九	一、二一六
東京	三、九三九	一、一六五
関東	一、八四〇	四八六
関西	一五九	六六
東北	一〇一	四二
計	九、五六一巻	三、〇五三人

前代表役員

故 岡部千三先生を弔う

本年三月始め頃より不調がみられ、その月の二十日毛呂病院に入院されましたが、施療看護も空しく四月五日急逝されました。肝臓癌、享年七十四。永い教職を終えられ、晩年を観音にご奉仕されてのご一生でございました。

円満なお人柄で、信仰に篤いお方であられましただけに、悔まれてなりません。

四月七日自宅葬に、鳥居観音役員、全職員会葬し、弔辞を捧げて、心ろからご冥福をお祈り申し上げました。

信者の皆さんには、長年格別のご厚誼を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

追って、後任には平沼宏之氏（平沼先生孫）が就任いたしましたので、今後共一層のご協力が戴けますよう、ご報告旁々、お願い申し上げます。

合掌

弔辞

岡部先生卒然の訃報を耳にし、驚愕その虚真にまどいました。今尚先生の温容は瞼に残って消えませんが、既に幽冥を異にされた霊前に額づき、心ろから哀悼のまことを捧げます。

先生は人と為り寛容、邪曲に正しく、温厚台蕩として信仰に篤く、接する人をして自から膝下に寄らしむるの徳風を備えられました。鳥居観音開祖平沼弥太郎が、生涯をかけての事業を、あなたに托された所以も、亦このことを措いて他にありません。

昭和四十一年より霊場の運営に参画され、その後、代表役員として総統に当られましたが、今日、日を逐い法輪の旺かんなりますことは、一に先生生前のご尽瘁の因って齎らされたことでございます。

この上は先生の遺績をふまえ、護持育成に努める所存でございますので、尽未来際ご冥助を賜わりますよう。玆に生前の遺徳を偲び、深くご瞑福をお祈して弔辞といたします。

昭和五十六年四月七日　鳥居観音代表　平沼康彦

合掌

鳥居観音だより

四月

桜に続いて、「つつじまつり」が始まり、お山は紅と萠える新緑に彩どられて、観音さまの裾は、さながら、錦で織られた様子です。

そうしたなかで、春の大祭も大勢の参拝で、盛大に行なわれ、日曜日など、子供連れの家族で賑わい遠出の自家用車など、一日二〇〇台を超えました。

特に一度参拝された方が、家族や、ご近所の方々をお連れしたという声が聞かれます。ほんとうに、ありがたいことです。

○岡部千三氏（当山前代表役員）四月五日急逝さる

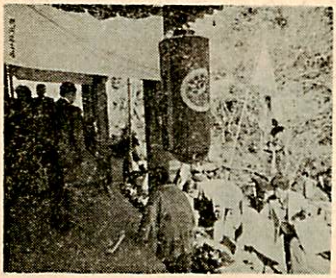
（この項本紙第二十一頁に特集）

○終えた行事とお詣り

○春季例法要

四月十七日、前日の雨もあがって、朝からの快晴村内のご詠歌衆の先着に次で、日本火災海上保険の幹部連、埼玉トヨペット平沼社長、梶谷副社長他十名、川越市斉藤恒作講中五五名、秩父市松本忠太郎講中二五名、その他一般参拝者の上山が続き、定刻十時半、本堂の外に立たれる人達もある中に、導師尾尻老師ほか村内寺院の随喜のもとに厳かに行われ終って尾尻老師より「岡部千三氏の急逝と露命」について涙の法話があり、次で山頂三観音、玄奘三蔵塔の法要を済まし、爾後適宜山内を探勝されてのお帰りであった。

開祖平沼先生ご夫妻も常に変らぬお元気なご参拝です。仏前に額づかれるお姿を拝して、どれ程の感懐であろうかと、思われることです。



○主なる参拝

八　日　青森県工藤儀一郎様上山。

九　日　大泉学園、滝田トキ様他ご一行団参。

十二日　埼玉トヨペット（株）コロナ会団参。

十八日　朝霞市、広瀬電機（株）社員研修会。本堂に於て尾尻老師講演「アメリカの新聞が特集した「世界最強の競争相手国日本と仏教」について、一時間半。

桜に次いで咲くつつじ

十九日　入間市、桜井為一様、水子供養並に一万体観音奉安。

同　日　青梅市、小沢常男夫妻、水子供養。

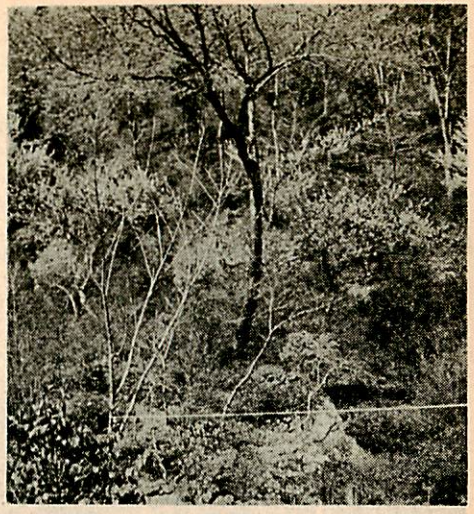
二十日　広島県因島市、村上太作様ご一行団参。

二六日　浦和市、木嶋イセ様、朝六時安全祈願。

二七日　練馬区江古田、竹友会保田勲様ご一行団参。本堂に於て供養の後、尾尻老師の法話、「今の若い者は」と意見をすると、「時代が違う」とソッポを向かれ勝であるが、「昔しはこうだったが、今はこんな時代になった」と話して聞かせば、「大変だったなあ」と却って共感を寄せてくれる筈、人間の胸巾でみるか、仏の寸法で語れるかの違いではあるまいか—と。

庫裡で懇親会、民謡あり、詩吟あり、小唄もあって、午後一っぱいくつろがれる例年のご参拝であった。

二九日　鴻巣市、吉田孝様他上山。



山内のつつじ

五月

天皇誕生日から五月の連休にかけ、つつじの満開の中で、大勢の参拝。歩道を登る子供達は、花のトンネルをくぐってはしゃぎ、車参道では登山車の、調整をするなど、大変な賑わいであった。

○主なる参拝

五　日　国分寺市、山上喜久枝様上山。
　　入間市、小田徳一様上山。
八　日　平沼先生ご夫妻参拝。
お詣りが何よりの楽しみだと仰云られる。
全山を巡拝され、種々のご指導がなされるが、凡て護り育てるという、心ろ温まるものである。
十一日府中市、中央老人会赤池様他五十名団参
本堂に於て供養祈願を終えた後、尾尻老師の法話「鳥居観音縁起と仏の寸法、人間の寸法」に就いて。その後庫裡で昼食懇談があって全山巡拝、時恰かも新緑のシーズン、気澄む幽邃な霊場に一入感に打たれての下山であった。
十四日　東京世田谷、本田智光様ご一行団参。
十五日　神奈川県大和市、柏木亘様参拝。
法華経二巻、（一巻の長さ十五米）、写経して、ご自分で表装しての奉納、現在まで計六巻。親しかった故人への供養とされる、奇篤な人である。
十五日　川崎市仏教婦人会七〇名団参。

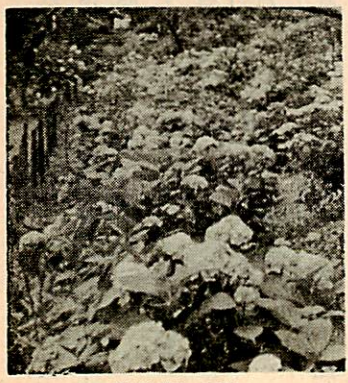
十六日　越生町、福寿講畑様ご一行二五名団参。
十九日　富山県、井上正雄様、一万体観音奉安。
二四日　清水市、松田江畔先生（青鋒会）五五名恒例の団参。
二七日　川崎市、宮田留吉様他上山。
同　八王子市、小俣喜久治様一万体観音奉安
三一日　バス四台、二〇〇人団参。

六月

入梅月。中旬下旬と続いた雨、「あじさい」だけが身色を変えて見頃となる。
来月の卒塔婆供養の受付も始まり、庫裡は塔婆書きで、忙しい毎日であった。

○主なる参拝

五　日　東武観光バス十一台団参。
六　日　狭山市、六本木初代様上山。毎月鳥居観音職員の血圧測定を奉仕して下さる。
七　日　入間市、吉田健夫妻上山。
八　日　平沼先生ご夫妻、お元気な参拝。
お山を巡られ、参拝の状況など報告を受けられ、職員を励まされてお帰りになる。
九　日　東京豊島区寿楽会ご一行団参。
十一日　青梅市、富田秋夫様上山。
十四日　浦和市、渡辺章介様、松井磐様祈願二座
十六日　八王子市、小俣喜久治様上山。
十八日　入間市、中村敏三様、一万体観音奉安。氏は十八日毎月の参拝、篤い信心家でいられる。
二五日　横浜市、坂口文子様上山。
二七日　板橋区、植村セツ様、植村光男様。秋田市、石塚様。国分寺市、三宮菊枝様。秩父横瀬村、東林寺住職平塚暁二老師夫々参拝。師は曹洞宗布教師として活躍中。

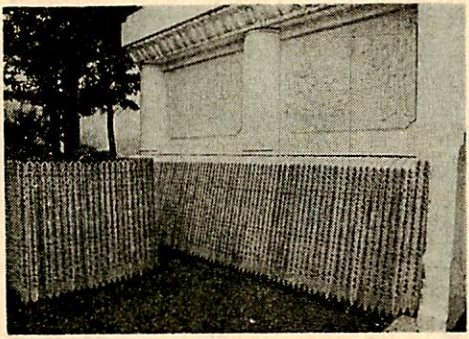

あじさいの花

七月

○卒塔婆施餓鬼法要（塔婆数六五五本）

七月十六日、山頂の三観音の堂内に於て厳修。お塔婆は、法要終了の後、堂外の裾にたてられ、観音さまや、ご先祖さまのおところを荘厳し、併せて、おもりをしていただきます。

平常お詣りされる方々が、このような多くさんのお塔婆をご覧になられて、ご縁にあづかりたいと—お申し込みが絶えません。



堂外にたてられたお塔婆

○主なる参拝

五　日　国分寺市、佐藤良様、一万体観音奉安。千代田区、菅谷義夫様、一万体観音奉安

十二日　入間市、井上竹吉様他上山。

十九日　八王子市、有野欣也様、一万体観音奉安

二九日　神奈川県大和市、柏木伊助様他上山。

八月

この月は名栗川沿いは、川遊びの家族連れで混雑します。鳥居観音のお山も、子供会などの参拝が重なりました。

殊に恒例の「灯篭流し」の法要は、皆さんの共感をいただいて、奉納花火や、盆踊りなどで賑わいました。

○流灯大施餓鬼法要（この項本紙第二頁に掲載）

流灯の数　一、五三九灯

○主なる参拝

五　日　青森県、鎌田広志様、一万体観音奉安。

九　日　名栗村、勝又則夫様、一万体観音奉安。

十七日　新宿区、広瀬則明様、一万体観音奉安。
十八日　葛飾区、渡辺登夫様、一万体観音奉安。
二四日　新宿区、大金順江様ご一行団参。
二六日　板橋区、植村セツ様他上山。
　　福島若松市、兼子様他上山。
二七日　相模原市、品川真理子様一万体観音奉安

九　月

立秋も過ぎれば、流石の夏も老け疲れて、風のそよぎにも秋を感じます。

暑さ寒さも彼岸まで……と一年中で最も安定したこの季節に、私共は静かに自分を省み、加えてご先祖さまに報恩感謝を捧げることを、習わしとして参りました。

中秋の明月は雲にかくれましたが、頂戴した若栗をお供えして、しみじみ倖を思ったことです。

○秋彼岸法要

お中日、講中の先祖供養、家内安全の祈禱諷経。

○主なる参拝

九　日　戸田市、大泉広子様、塔婆供養七体。
十四日　中央区、小玉岩男様、ご祈禱。
十五日　敬老の日、団体参拝多し。
十六日　越生町、藤島弘士様、一万体観音奉安。
十八日　八王子市、大塚雅子様、一万体観音奉安
十九日　八王子市、小池欣一様、一万体観音奉安
二二日　平沼先生ご夫妻墓参。文庫の管理について、特に細かなご指導をいただいた。
二三日　飯能市、伊藤善治ご夫妻、観音二体奉安
二六日　新宿区、小田隆一様、一万体観音奉安。
〃　新宿区、青木国江様、一万体観音奉安。
〃　荒川区、美濃部美津子様、一万体観音奉安。
〃　新宿区、大金俊夫様、一万体観音奉安。
〃　新宿区、小田れい子様、ご祈禱。
〃　横浜市、佐藤喜美子様、ご祈禱。
〃　栗山登茂様、栗山和久様、ご祈禱。
二七日　平沼先生ご夫妻ご参拝。

○これからの行事

○十二月十日　大黒祭

平沼先生が刻まれた大黒さまは、四百数十に及ぶといわれますが、その最後にご本尊とし彫られたものが、現在本堂の左脇にお祀りしてあります。

商売繁昌、福徳の神さまとして、親しまれます。

○十二月八日　釈尊成道会

お釈迦さまが、お悟りをひらかれた佳日です。

降誕会、涅槃会と共に、寺門の三大行事です。

○十二月三十一日　除夜の鐘

夜本堂でお経があがった後、十二時を境に、除夜の鐘が撞かれます。

谷を越え、里に流れる一〇八声、撞く人、聞く人……ともに迎える新年の幸を願うことです。

五十二年大鐘が建って以来、昭島方面、浦和方面からのお詣りがあり、初詣でに出向かれるご様子です。

○一月元旦　新年祈禱会　十時本堂で厳修。

年々ご祈禱の申し込みも増加し、着飾った参拝者もみられ、川越の原田愛助様ご一行、飯能の平沼玉枝様ご家族、川越の斉藤恒作様ご一行、所沢の小山権之亟様など、毎年欠かせないお詣りで、お雑煮に賀詞交換などあっての下山です。

一般のご祈禱など随時お受しております。

（家内安全、商売繁昌、交通安全、病気平癒、入学祈願、その他）

○二月三日　節分会（豆撒き）

お詣りの方々に、福豆を差し上げます。

○二月十五日　釈尊涅槃会

○三月二十一日　春彼岸法要

○四月一日より　つつじまつり

○四月十七日　春季例法要

大勢さまのお詣りをお待ち申し上げております。

とりゐ　第五一号　発行日　昭和五十六年十一月十七日
発行人　埼玉県入間郡名栗村　鳥居観音　平沼　宏之
印刷所　浦和市仲町二―八―十五　武州印刷株式会社
発行所　鳥居観音　電話　〇四二九七―九―〇四一七

白雲山 鳥居観音 観世音センター案内図

琴比羅神社
棒の峰
秋葉山
有間渓谷
納経塔
面白岩
三蔵塔
平和観音
白雲橋
見晴台
教世大観音
休憩所
大黒殿
自動車道
大鐘楼建立
観音滝
子育地蔵
トーテンポール
玉華門
仁王門
梅月橋
梅鉢の墓
諏訪神社
稲荷神社
阿弥陀型四輪
炭谷川
庫裡
本堂
鳥居文庫
ますつり場
観世音センター
水泳場
父峠
至秩父
正丸峠
谷
鳥居観音入口
名栗渓
至高崎
50分
飯能
荒川
大宮
25分
名栗川
小沢峠
川越
青梅
豊岡
浦和
拝島
所沢
川口
58分
練馬
赤羽
八王子
立川
新宿
池袋

春の行事

○新年元旦祈禱　1月1日　10時

○春彼岸法要　3月21日　10時

○つつじまつり　4月1日～5月31日

萌える新緑の中に、つつじが紅を織りなします。

○春季大法要　4月17日　10時半

○あじさいと藤の花　5月～6月

○常時供養、祈禱申し受けております。

ご先祖・水子供養

家内安全、商売繁昌、交通安全、入学祈願など

○お山参拝
文庫見学　常時9時～4時半